

特集に当って

相沢 りえ子

「快適性」の度合いについての評価は、非常に漠然としていますが、空間に人間が生活する上で必須の要素です。本特集は、この快適性をできるだけ科学的に追求している方々に執筆をお願いしました。最近、都市再開発計画やリゾート構造等が実施され、われわれをとりまく居住環境、職場環境、余暇環境は総合的に整備されつつあります。市場に多種多様な物があふれ、個人の好みに合った物が簡単に入手できる現代、環境計画や空間も個人の価値感、感性、嗜好が基盤となっていなくては受け入れられなくなっています。そして、個人レベルで感じる快適感は一様ではなく多様化してきていることも事実です。快適性の計測のための指標の決定や定量化に関する研究や指標を実施へ結びつける方法等の研究課題があります。空間の快適性は、古くから環境工学、土木工学、建築学等でさまざまな研究と試みが成されています。そこで各分野の方をお願いしてOR的なアプローチや、専門分野特有の考え方について説明してもらいました。ここでの空間の定義は自然環境といった広い空間から室配置といった比較的狭い空間までを含むものとします。まず第1篇目は、快適性の計測と指標化という快適性の体系について、内藤正明氏、森田恒達氏、青柳みどり氏にご説明いただきました。内藤氏等は、快適性を、都市や自然環境の潤いやゆとりといった意味のアメニティという言葉で扱われ、アメニティ指標の計量化の簡単な歴史的経緯を紹介し、地域住民の感覚を評価した例として、都市や森地を対象とした指標作成例を解説されています。これらの指標は、自然保全計画策定に用いられる他、将来の快適さのレベルの予測にも適応されているとのこと。地域環境の快適性については、北村真一氏が説明されています。ここでは地域環境整備計画への住民の関わり方を提案しています。さらに実際にアメニティタウン計画で行なった予備調査、住民意識調査分析、実施計画案の策定までのプロセスを例に掲げ、住民意識として収集された複雑な認知や思考のデータをわかりやすく整

あいざわ りえこ (株)構造計画研究所

〒160 新宿区西新宿2-7-1 新宿第一生命ビル

理する手法の必要性を説かれています。

余暇環境に対するアプローチとしては、宇治川正人氏にリゾート施設の魅度の分析例を紹介していただきました。最近ブームであるリゾート施設の開発においては、自然環境と人工施設の調和、さらに経済的採算性という最も重要な制約の中で快適性の追求を行なう必要があります。ここではスキーリゾートの施設の魅力度の構造をレポートリーグリット発展手法を用いて求め、構成要素の重要度の順位づけを最近話題になっているマーケティング手法の1つであるコンジョイント分析手法を用いて分析した例を説明しています。企業ベースの環境開発の戦略を決定するさいには大変参考になると思われます。

次に、職場環境をテーマに後藤敏彦氏にこれからのオフィスのあり方について論じていただきました。企業の中での創造活動のプロセスに則したオフィス環境のあり方や、企業の成長プロセスに対応したオフィス環境を提案されていることがおもしろいところです。

村川三郎氏には、施設における快適性をテーマとして論文をお願いしました。施設の快適性の意味を限定解釈し、しかるべき施設が満足のいくサービスを与えているかという観点にたつて、日常生活に必要な衛生器具の適性規模を待ち時間により評価し、属性に応じた基準を設定したプロセスを解説していただきました。実際に建築家が施設を設計する際には、サービスレベルに応じて、ここで紹介されたような衛生器具算定値をベースに検討されています。最後のしめくくりとして、青木義次氏に快適空間を作り出す建築学分野の立場で、建築家の発想方法について語っていただき、建築家の思考形態を考慮した室配置CADについて紹介してもらいました。

最適な設計を行なう場合数理的にアプローチすれば、まず制約条件を設定しその中でパラメータ値を決定しますが、建築学的にはその制約条件は全体的判断によって逸脱がゆるされるものとなります。そこで Fuzzy 集合理論を取り入れた室配置CADを開発されました。青木氏が説明されている建築学的な発想・思考方法は、ORワーカーにとって興味深いものです。

以上、空間に限った快適性を取り上げましたが、空間に限らず“衣・食・住”生活全般において心地良さ、おいしさ使い良さといった快適性解明の研究は盛んに行なわれています。OR手法はこれらの研究とより密接に関わる余地はまだあるのではないかと思います。